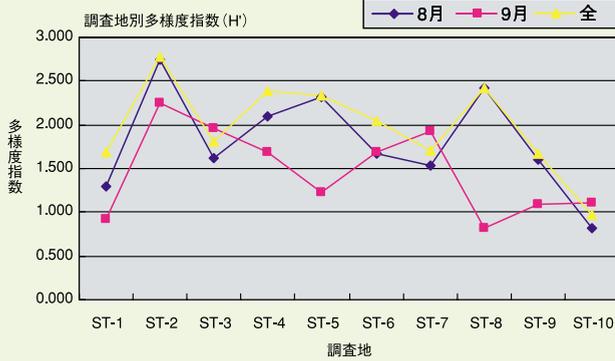


モニタリングの指標種についての検討

本調査では移動能力が比較的低く、定量的な調査対象として適している地表歩行性昆虫類を指標種候補として調査し、種数および個体数を計測した。

●オサムシ科の地点・調査回別の多様度



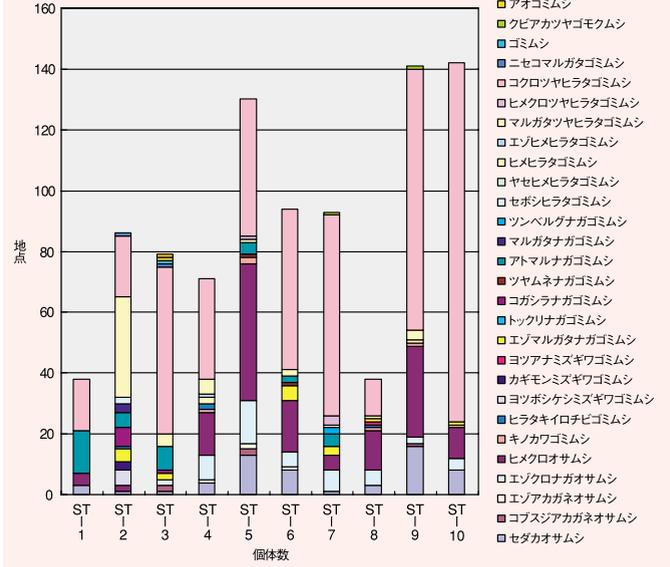
地点名	環境区分	備考	林齢区分
ST-1 笹	地	トドマツ植林が枯れた跡	—
ST-2 地がき跡地	草地(地がき後2年)	—	—
ST-3 ミズナラ植林	筋刈りされた若い植林地	3年	3年
ST-4 アカエゾマツ植林	広葉樹も混生	20-30年	20-30年
ST-8 沢沿いの広葉樹林	沢左岸斜面地	40-50年	40-50年
ST-5 ヤチダモ植林	沢に近い植林地	40-50年	40-50年
ST-9 ハルニレ・ケヤキマハンノキ林	ST6より若い樹林	60-70年	60-70年
ST-10 ダケカンバ植林	斜面中腹の植林地	60-70年	60-70年
ST-6 ハルニレ・ケヤキマハンノキ林	大径木あり	60-70年	60-70年
ST-7 ミズナラ・カシワ林	大径木あり	80年	80年

このようなことが話し合われました

●委員長 ●委員 ●事務局

- 地表性甲虫を指標種として用い、多様度指数を評価した場合、正しく論議する事はできるのか。資料を見る限りでは多様度指数で評価するのは余り良い方法とは言えない。
- 多様度指数を用いる場合、同じ生息環境を使用している種で評価するのが望ましい。調査の結果から、河原等を生息環境とするミスギワゴミム

●8月・9月合計地点別オサムシ科出現状況



シが確認されており、森林性の種とは別に分析するべき。いい森林に出現する種を指標にするのがよい。

- 学会レベルで、地表性甲虫を用いた評価方法は確立しているのか。
- 同じ種でも地域により使用する資源が異なるため、必ずしも他の地域では適用できない。地表性甲虫を森林の評価に用いる場合は、リファレンスとなる森林での甲虫の種組成と比較を行うのが確実。

試行実施について

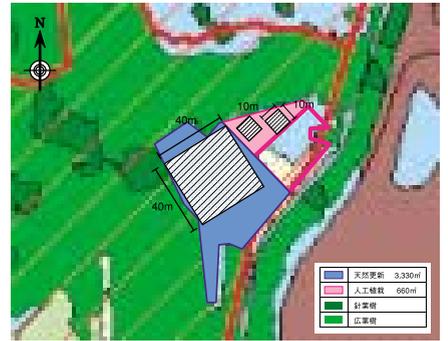
◆試行実験の目的

- 近接したミズナラの植栽地で、シカの被食が見られている。
- シカの被食は、今後、樹木成長を阻害する最大要因となると考えられる。
- このため、シカの被食の有無による樹木の成長推移を検証し、今後の事業内容に反映させる。

◆実験区の設定

- シカによる被食の防除方法は、防鹿柵で対象範囲を囲む方法とする。
- 再生手法ごとに柵設置区(防止区)と未設置区(対照区)を隣接させて設定する。
- 設定する箇所は、シカの生息が近くで見られる箇所とする。

●実験区イメージ

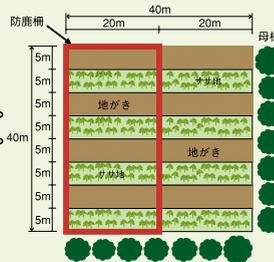


◆実験内容

(1) 天然更新実験区

- 地がきは更新幅5mと残置幅5mを交互に配する。
- 実験区は種子散布の直前に整備する(平成18年8月頃)。
- 地がきの後、翌年秋に防鹿柵を設置する(平成19年10月)。
- 調査は平成18年秋からおこない、実験期間は3年程度とする。
- データ採取は年2回(6月、10月)とする。
- 散布された種子量、稚樹の個体数、樹高等を調査する。

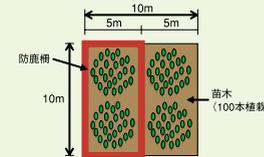
●(天然更新実験区)イメージ図



(2) 人工植栽実験区

- 実験区は、100m²区画を2カ所程度とする。
- 地がきは、植栽区画1カ所あたり100m²とする。
- 実験区は植栽適期に整備する(平成18年10月)。
- 地がきの後、直ちに防鹿柵を設置して、苗木を植栽する。
- 調査は平成18年秋からはじめ、実験期間は3年程度を目途とする。
- データ採取は年2回(6月、10月)とし、植栽木の生被を確認して、樹高を計測する。

●(人工植栽実験区)イメージ図



このようなことが話し合われました

●委員長 ●委員 ●事務局

- 既存造林地でのエゾシカによる食害が大きいという調査結果があるが、それを踏まえて実際にシカの食害をどのくらい防ぐことができると考えているか。実際の計画と防止策との関係はどうか。
- エゾシカによる食害の影響がどの程度あるのかまず調べるため、試行的な実験をやりたい。そして、影響があることを確認してからどう対応していくか検討したい。
- 釧路町、標茶町でのシカの生息状況については、かなり高い密度で推移している。雷別地区で森林再生を行う場合には、試行実験や生息調査を行いつつ、シカ対策を検討する事が大切。

◆シカの生息状況調査

- シカによる被食の程度は、シカの生息数に左右されると考える。
- 試行実験と合わせてシカの生息数の動向を把握する必要がある。このため、シカの生息状況の調査も併せて実施する。

